

【研究論文】

児童養護施設における安全委員会方式の運営について —導入効果と効果的で安定した運営のために必要なこと—

Introduction of the Security Committee Program into Child Protection Institutions

築山 高彦* 山田 光治**

TSUKIYAMA Takahiko, YAMADA Mitsuharu

要 旨：

安全委員会方式を導入している施設の活動の状況と職員へのアンケート調査から、安全委員会方式導入の効果と効果的で安定的な安全委員会の運営のために必要なことについて検討した。導入の効果としては、個々の児童も職員も意識面や行動面でよい変化が認められること、組織としての対応が徹底されたこと、関係機関との連携が強化されたこと、職員の児童処遇への自信や安心感が生まれてきていることが挙げられた。また、効果的で安定的な安全委員会の運営のためには、「丁寧で継続的な聞き取り調査の実施」、「厳重注意以前の対応の的確な選択」、「厳重注意の適切な実施と日々のアフターフォローの重要性」、「児童・職員への周知の徹底」を指摘した。

Abstract

In this paper, we examined Security Committee activity and staff's opinion in Child Protection Institution so as to find out necessary conditions for effective and stable operation of Security Committee. We found that the effectiveness of Security Committee are ①good change of children's and staff's mindset and behavior ②thoroughness of systematic approach ③strengthening of cooperation with related organization ④staff's confidence and stability for upbringing. Furthermore, we suggested that effective and stable operation needs ①careful and continuous inquiring survey ②appropriate guidance before stern warning ③appropriate stern warning and following up ④thorough explanation to children and staffs

キーワード：児童養護施設、暴力問題、安全委員会方式の効果、安全委員会方式の運営

Keyword: Child Protection Institution, Violence, Effectiveness of Security Committee Program, Operation of Security Committee Program

I はじめに

筆者らは、先に、児童養護施設が抱える課題として、暴力（「職員から児童への暴力」「児童間の暴力」「児童から職員への暴力」）の問題があり、ゆえに、入所児童と職員の安心・安全な生活が保障されず、要保護児童の家庭的養育の受け皿として、その養育と自立を目指すという機能が十分果たされていない状況があることと、こうした暴力問題への効果的な対応として「児童福祉施設安全

委員会方式」があり、その導入について、平成24年度から、愛知県の児童相談センター（児童福祉法でいう「児童相談所」。以下「児童相談所」という）が施設と協働して取り組んできた経緯があることを紹介し、その具体的な取り組み内容を整理する中で、安全委員会方式の導入のために必要な条件と必要な手続きについて考察した。（岡崎女子短期大学「地域協働研究」第1号）

今回の研究では、導入した施設における実際の安全委員会の運営状況と職員へのアンケート調査

*愛知県西三河児童・障害者相談センター

**岡崎女子短期大学幼児教育学科

から、導入した効果がどのように上がっているのか、また、効果的で安定した運営のためには、何が必要であるかを検討することを目的とする。なお、筆者のうち、築山はⅡで取り上げるA B両施設の外部委員、山田はB施設の外部委員(委員長)を務めている。

Ⅱ 導入施設の運営状況

1 A学園

A学園は愛知県で安全委員方式を初めて導入した施設であり、平成26年11月30日現在、導入して1年10か月が経過している。ここでは、立ち上げ集会から、現在までの運営状況をまとめ、A学園としての安全委員会運営のポイントとなる項目について整理する。

(1) 安全委員会立ち上げ集会

A学園の立ち上げ集会は、全ての職員と児童がホールに参集し、平成25年1月末日の午後7時から行われた。園長あいさつと委員長あいさつの後、委員紹介があり、続いて、安全委員会についての説明がなされ、最後に、職員代表、男子児童代表、女子児童代表の決意表明がなされた。児童の決意表明は児童が自分の考えを自分の言葉で表現したものであり、緊張しながらも堂々と発言でき、大いに盛り上がった。参加した職員は全員スーツを着用するとともに、緊張した面持ちで、児童も職員も「今日から施設が変わる、みんなで頑張る」という強い決意が共有できるものとなった。

(2) 1周年記念集会

A学園の1周年記念集会は、平成26年1月末日の18時から、安全委員会委員と児童の夕食会から始まった。委員と児童がいっしょに食事をしながら歓談し、夕食後の18時45分から記念集会を開催した。園長、委員長あいさつの後、安全委員会方式を主唱した田嶋教授からもあいさつを頂戴し、各委員からのメッセージに続き、女子代表、男子代表、職員代表の決意表明が行われた。児童からは、安全委員会が始まってからは、暴力は絶対にいけないことだというように意識が変わったこと、これからも頑張るという発言がなされた。

1周年記念集会の後、A学園は各児童に1周年記念集会で考えたこと、思ったことを聞いてい

る。主なものを示すと、「年長児童が暴力や暴言がなくなった。よくなったと思う。自分自身も気を付けるように心がけている(中2女子)」、「安全委員会があって、学園で嫌なことを一人一人聞いてくれるからその取り組みはいいと思った。年下にイライラしたら口でいう。それでも聞かなかったら先生にいったりして、ちゃんとした行動をとりたいたい(小4男子)」というように、子どもたちに、暴力はダメ。口で言う。という意識が定着、またその状況を評価する発言が多くみられている。

(3) 第1回から第14回までの安全委員会開催状況

これまで、A学園は14回の安全委員会を開催している。その状況について整理したものが表1である。

これを見ると、これまで12件の事件が審議されており、内訳は、児童間の暴力が6件、職員への暴力が1件、職員の適切でない関わりが5件となっている。安全委員会の対応としては、事件が発覚した後の担当及び内部委員が注意・指導した対応を承認したものが7件、審議を経て委員長注意を行ったものが4件、関係した児童に委員長注意を始め、嚴重注意、別室移動、一時保護まで行った事件が1件となっている。また、力の差のない暴力や暴力以外の問題行動についても7件が報告されている。

事件後の対応については、「内部委員注意」を行った者については、日常的な生活の中での個別的な声掛けや励まし等によりその後の当該児童の行動は安定しているが、「委員長注意」や「嚴重注意」を行った者については、児童の状況に合わせた個別的な支援計画を作成し、毎日の生活の中で、継続的な支援を行っている。

なお、審議対象となった事件は、第7回までに11件が発生しているが、第8回から14回までは1件のみの発生となっており、施設内は、安定してきている様子がうかがわれる。また、12件の事件の内、7件が児童への聞き取り調査により発覚していることも特徴的である。

(4) 嚴重注意の状況

第7回目の安全委員会で、A学園としては、初めての嚴重注意を行っている。まず、安全委員会の場に当該児童と担当職員を出席させ、委員長から、「なぜ今日、この場に呼ばれたのか」「何が悪

表1 A 学園の運営状況

区分	期日	審議事項		安全委員会対応	力に差のある暴力以外の問題行動、報告事項等	安全委員会対応後の施設フォロー状況
		事件概要	事項			
第1回	H25.2末	①小3男の挑発に対する高1男の暴力(押し倒す) ②注意された小3男が職員へ暴力(殴る蹴る) ③小6女が小3女に暴力(頬を殴る) ④中1女が年下の女5名に暴力(叩く)		①内部委員注意承認 ②内部委員注意承認 ③内部委員注意承認 ④内部委員注意承認	・小4男同レベルのケンカ、幼児男の性的な悪ふざけ(ズボンの上から触る、トイレを覗く)	①②③④ともに職員からの個別的な声かけ、励まし、関わりを増やすことで安定
第2回	H25.4下旬	①小3男が小1男に性的悪ふざけ(ズボンを脱がす)		①内部委員注意承認	－	①日常生活での悪ふざけへの注意
第3回	H25.6月上旬	①暴れる中1男への女性職員の感情的な対応 ②ぐずる小2女の女性職員の強い指導		①職員に委員長注意 ②職員に委員長注意	・小5男、小6男の万引き →学校と協力して対応	①②とも冷静な関わりができており児童との関係も安定へ
第4回	H25.7中旬	①幼児同士のケンカに仲裁に入った男性職員の強引な指導 ②小3男がパニック時の女性職員の乱暴な制止行動		①内部委員注意承認 ②内部委員注意承認	・中1男無断外出 ・聞き取りの担当者を変えてマンネリ防止	①②ともに内部委員による継続的な確認を行う
第5回	H25.9月上旬	－		－	・中1男無断外出	－
第6回	H25.10下旬	①小3男が年中男に指示して年次女にキス。自分もキス。あわせてぐずる・暴れる行為も目立つ。		①委員長注意	－	①本児の得意な折り紙を介して個別的な関わり「折り紙作戦」「さわやかな朝・眠り作戦」を継続実施
第7回	H25.12月上旬	①小3男、小5男、小6男、中1男、中3男の間で相互に性的な加害行為 →小3男の聞き取りから発覚。事実関係を確認し、措置見相に報告、見相間で処遇を検討・調整した上で、委員会に提出		①1名委員長注意 4名厳重注意 3名別室移動 3名一時保護	－	①各児童別に「これからの教科書」(ルールや目標等を分かりやすくまとめたもの)を作成し、それを意識した生活、個別対応を継続実施
第8回	H26.1末	－		－	第7回事案経過報告、安定	－
第9回	H26.2末	－		－	同上	－
第10回	H26.4下旬	－		－	同上	－
第11回	H26.6初	－		－	同上	－
第12回	H26.7月上旬	第7回事案の児童5名の生活状況が安定し、努力が認められることから、安全委員会ですべての全員に「信頼・応援面接」を実施して励ます			－	－
第13回	H26.9月上旬	①小5女のぐずり、暴れる行為への女性職員の感情的な対応		①児童、職員に委員長注意	①中1男無断外出、窃盗 ②小2男性的悪ふざけ	①内部委員による職員と児童の関係改善支援(「交換日記」「自分を知らうカレンダー」等の実施)
第14回	H26.10下旬	－		－	①小2男悪ふざけ	－

※①＝その場で発覚した事件 ①＝聞き取り調査により発覚した事件

かったのか」「どうすればよかったのか」「これからどうしていくのか」について児童に尋ね、児童は自分の言葉で質問に答えることが求められる。担当職員は児童の発言をフォローするとともに、担当職員としての児童への思いを話してもらう。その上で、委員長から、改めて今回の出来事はよくないことである旨を伝えて反省を促し、これからの児童の頑張りを期待する旨が伝えられる。続いて、各委員からも児童と職員に同様の質疑が行われる。このA学園の事件は、小学校3年生から中学校3年生までの5人の児童間で継続的に相互の性加害行為（性器を揉む、舐める）があったものであり、再発であった4人に対して嚴重注意がなされた。その様子は以下のものであった。

まず、委員長が上記の質問を行った後、B委員から「二度としないという君の言葉を信じていいのか。担当の職員さんも本当に〇〇君をこの施設で養育できるのか」という厳しい質問がなされた。児童は答えられず、戸惑う様子であったが、それを担当職員が口添えしてフォローするとともに、職員の児童に対する思いが涙ながらに話された。それを見た児童がびっくりして職員の顔を見つめるというシーンがあり、続いてC委員（学校長）から「君が学校でとても頑張っていることは担任の先生から聞いてよく知っている。私も、君の明るく元気な毎日の朝の挨拶をととてもうれしく思っている。君がこれから頑張るといふのであればそれを信じて応援する」との発言があり、すかさず児童をフォローする場面となり、さらにD委員（主任児童委員）も「〇〇君の朝の登校姿を毎日見ているよ。小さい子の面倒をよく見ていて偉いね。私は君をちゃんと見ています。応援します」というように、さらにフォローするという状況になった。全く台本はないのであるが、他の3人の嚴重注意も同様の展開となり、面接場面が自然に展開していった。このように、この嚴重注意の場は、いけないことをいけないとしっかり子どもに伝え、どうしたらいいのかを言語化させる、学習の場であるとともに、子どもに関わる地域の大人たちが寄ってたかって応援する、エールを送る場となった。

(5) 聞き取り調査

(3)でも述べたが、12件の審議対象事件の内、7件が聞き取り調査によって発覚したものであつ

た。特に第7回の事件については、深刻な問題でありながら、導入後7回目の聞き取り調査で初めて子どもの口から出たものである。今回の性加害行為は、その後の詳細な聞き取りにより、職員の目を盗んで、ほんの数分の間に行われていたことが判明したが、それまで、職員は気づかずに、いわゆる潜在的な性暴力になっていた。施設内の物理的な死角を完全になくすることは不可能であるから、児童の口から出てこなければ、この問題に職員はずっと気づかなかったかもしれない。つまり、聞き取り調査により、初めて潜在的な暴力の把握が可能になったといえる。

(6) 児童相談所の支援と施設の独自性

導入前からの児童相談所との関係から、導入後も、安全委員会の運営について児童相談所と施設が相談しながら進めた。導入開始から1年程度は、児童相談所が会議の進め方、資料等細かな点にまで指導することが多かったが、1年を過ぎると、施設側の力が十分につき、方針等の調整をする程度までになった。また、運営上の様々な施設独自の工夫（ex.聞き取り調査のマンネリを防ぐために聞き取る担当を交代したり、聞き取り項目を工夫したり、嚴重注意後の経過良好児童に対する「信頼・応援面接」の実施を提案する等）ができるようになってきた。

さらに、委員長注意や嚴重注意の対応がとられた事案に対しては、その後の施設生活の中でフォローしていくための取り組み（ex.第6回で審議された児童に対する「折り紙作戦」（児童が得意とする折り紙を職員と2人で毎日おり、カレンダーに貼り付けていく）、「これからの教科書」（性加害行為を起こさないための誓いのことば、生活のルール、安全委員会の内容、学校生活の目標等で構成された個別のルールブックの作成と職員との日々の内容確認）、「交換日記」「自分を知ろうカレンダー」（職員と児童の関係修復のための交換日記と児童の気持ちの振り返りを促すカレンダー）が施設から提案される等、施設の処遇力の向上が見られてきている。こうした日々の取り組みは、安全委員会の審議結果をフォローするものであり、これがあつて初めて嚴重注意等の対応が効果的なものになってくるといえる。

(7) 学校との関係性

A学園の児童が通う小中学校の校長には、ほぼ毎回安全委員会に参加していただいている。校長は学校の代表者であり、関連会議等も多く、大変忙しい身でありながら、積極的に参加し、児童の処遇について活発に意見交換を行っている。安全委員会の場では、力に差のある暴力を審議することが原則であるが、A学園では、第7回以外、深刻な事件が発生していないことから、施設が抱える様々な問題やトラブルについても取り上げ、関係者がそれぞれの立場から、その対応方法等について丁寧に話し合うことができている。これにより、関係機関相互の理解は格段に深まるとともに、地域全体で施設入所児童を見守り、育てるという意識が醸成されてきている。また、こうした関係者による取り組みは、トラブルが将来的に大きな問題となることを防ぐ予防的な効果を持つのではないと思われる。

(8) 職員アンケート調査

A学園の職員19名（直接処遇職員）に対して、導入前と導入後の施設の状況等についてどのような変化が認められるのか、平成26年11月下旬にアンケート調査を行った。

その結果を集約すると、児童、職員ともに暴力はダメという意識が浸透してきたこと。児童は年齢が高くなるにつれて、暴力を我慢できるようになり、言葉で表現できるようになってきていること。年長児童が年少児童に対して優しくなり、生活全般が落ち着き、聞き取り調査により一対一で話す機会が増え、相互の信頼関係が強まったこと。職員間で、互いにフォローすることができるようになり、職員が一人で抱え込まなくなったこと等が指摘され、安全委員会方式導入の効果を全員が認めている結果となった。

2 B寮

B寮は平成26年11月30日現在、安全委員会方式を導入して9か月経過している。愛知県において安全委員方式を導入した2番目の施設である。ここでは、立ち上げ集会から、現在までの運営状況をまとめ、B寮における安全委員会運営のポイントとなる項目について確認する。

(1) 安全委員会立ち上げ集会

B寮の立ち上げ集会は平成26年2月上旬の午後6時30分から全職員と児童がホールに参集して行われた。施設長あいさつ、委員長あいさつ、安全委員会についての説明、そして委員紹介が続き、最後に、職員代表、男子児童代表、女子児童代表の決意表明がなされた。職員代表のあいさつは、これまでの自分の乱暴な対応を反省するものであり、男子児童からは、それまで一番暴言等が目立っていた児童の決意表明であったことから、参加した児童や職員からは驚きにも似た声が聞かれた。寒い中での立ち上げ集会であったが、A学園と同様、児童にも職員にも「今から施設が変わる、みんなで頑張る」という共通の意識が持てた集会となった。

(2) 第1回から第5回までの安全委員会開催状況

これまで、B寮は5回の安全委員会を開催している。その状況について整理したものが表2である。

これを見ると、5件の事件が審議されており、内訳は、児童間の暴力が4件、職員への暴力が1件となっている。安全委員会の対応としては、事件が発覚した後の内部委員（施設長）の注意を承認したものが2件、安全委員会の場で審議されたことを内部委員から児童へ伝える内部委員伝言が2件、委員長注意を行ったものが1件となっている。また、力に差のない暴力や暴力以外の問題行動についても10件以上が報告されている。

事件後の対応については、「委員長注意」を行ったものについては、当該児童の状況に合わせた個別的な支援計画を作成し、毎日の生活の中で、継続的な支援を行っている。

なお、導入後も職員の中には対応に迷いが見られたことから、平成26年8月下旬には児童相談所職員も参加して、職員全員が参加して、改めて安全委員会方式の理解を深めるための研修（3件の事例についての職員の対応について振り返る）を行っている。導入に際しては、繰り返し安全委員会方式の理解を深めるための職員研修を実施してきたが、導入後も、職員には「安全委員会が自分たちに代わって判断してくれる」、「安全委員会が裁いてくれる」「安全委員会にお任せと」いった意識や、暴力はダメと杓子定規に子どもと関わればよいといった誤解が根強くあったことから、

表2 B 寮の運営状況

区 分	期 日	審 議 事 項		力に差のある暴力以外の 問題行動、報告事項等	安全委員会対応後の 施設フォロー状況
		事 件 概 要	安全委員会対応		
第1回	H26.2末	①小3男の他児、職員への暴言、ぐずり、物を投げける、暴れる等	①内部委員（施設長） 注意承認	・聞き取り調査により、同レベルのケンカ、暴言等を8件確認。職員が事実を確認して対応	①状況に応じて職員が複数対応、生活の見通しが持てるよう日課を明示。イライラしたら深呼吸、その場から離れる等の指導。
第2回	H26.4下旬	①小6男、児童同士のケンカの仲裁に入った職員に暴力（殴る）	①内部委員伝言	・中2男、1年以上前から学校内での器物破損、施設内での窃盗等の問題行動があり、26.3にも窃盗が発覚→児童自立支援施設へ措置変更	①ADHDの診断で服薬中。他児とのトラブルの際への素早い介入と生活の枠組みを明確化。
第3回	H26.6上旬	①小2男の他児を叩く、蹴る等 ②中2女の暴言、威圧的な態度	①内部委員（施設長） 注意承認 ②内部委員伝言	・小5男2人が学校内で他児のキーホルダーを盗む→学校と協力して対応、謝罪 ・職員と児童の呼称について ・男性職員の女児への対応について	①学校と協力しながら、その場その場での指導を繰り返し行う。 ②手を出さないこと、大人を呼ぶこととの徹底。必要に応じて複数対応。
（第4回）	H26.7中旬	台風のために中止	－		
	H26.8下旬	職員研修会（安全委員会方式を導入してからの対応状況を振り返り、同方式の理解を深める）			
第4回	H26.9初	－	－	・聞き取り調査で過去に暴力を受けた、見たという報告がよく出る。 ・生活のルールブックの作成について	－
第5回	H26.11上旬	①小4男の物に当たたる行為、暴言（挑発的な発言）、他児を蹴る	①委員長注意	・学校で友人から「施設」というあだ名で呼ばれること ・中学女4人のグループ内の関係（いじめ）について	①刺激の多い環境を整理する。生活の見通しが立つよう日課を明示する等の個別の「〇〇くんわくわく支援計画」を作成して実施。

安全委員会方式の理解は、導入する前だけでは不十分で、実践しながら深めていく作業も必要であると思われる。

また、男性職員の年長女子児童への関わり方、職員と児童との間の呼称の問題、生活のルールブックの不十分さ等が安全委員会の中で話題となり、議論された。

(3) 児童相談所の支援と施設の独自性

導入前からの児童相談所との関係から、導入後も、安全委員会の運営については児童相談所と施設が相談しながら進めた。導入開始から9か月経過し、施設担当も力量をつけてきているがまだ、細かな部分の調整も必要な段階である。しかし、運営上の様々な施設独自の工夫（ex.安全委員会の一般職員の聴講、職員向けの安全委員会だよりの発行、職員向けの複数対応マニュアルの改訂）は主体的に行えている。さらに、委員長注意の対応がとられた事案に対しては、その後の施設生活の中でフォローしていくための取り組み（ex.第5回で審議された児童に対する「〇〇君わくわく支援計画」（児童に見通しの持てる日課を明示したり、職員間で共通の対応ができるように対応マニュアルを作成等）が職員から提案される等、施設の処遇力の向上が見られてきている。

(4) 学校との関係性

A学園と同様に、B寮の児童が通学する小中学校の校長は毎回出席してもらっている。両校長とも、B寮児童の学校生活の様子を的確に情報提供してくれるとともに、施設内の児童の様子にも関心が高く、その処遇方法にも積極的にアドバイスする等、学校と施設の相互理解は確実に深まっている。また、安全委員会の運営、審議についても関心が高く、毎回熱心な議論が行われている。A学園と同様、力に差のある暴力問題だけではなく、学校でのいじめの問題等も含め、幅広い情報交換の場となっている。

Ⅲ 考 察

1 安全委員会方式導入の効果

職員のアンケート調査と1周年記念集会後の児童の聞き取りから、個々の児童も職員も暴力はダメという共通の意識が持てるようになり、実際に

暴力が減少する等の変化が認められるとともに、組織としての対応が徹底され、児童集団としての落ち着きや児童と職員の信頼関係の強化、職員の児童処遇への自信や職員間の連携が強化されてきており、児童も職員も安全委員会方式が導入されたことへの評価は高いといえる。

また、A B両施設の運営状況からも、安全委員会の場で関係機関相互が持っている情報交換を行い、当該児童の望ましい処遇のあり方について議論できるようになった等、学校を始め地域の関係者との関係の強化が認められるとともに、委員長注意や嚴重注意後の日常場面での当該児童の支援計画を施設が主体的に考案する等、施設の処遇能力の向上も認められてきている。

今後は、個々の事例検討や、より客観的なスケールによる導入効果の評価を行うことも必要であろうと考えている。

2 効果的で安定的な運営のために必要なこと

安全委員会導入の効果を職員が実感しているとしても、その効果を維持し続けるためには、相当の努力が必要である。そこで、A学園、B寮の安全委員会運営状況から、そのためのポイントについて考える。

(1) 丁寧で継続的な「聞き取り調査」の実施

聞き取り調査は、安全委員会方式の必須項目の一つである。定期的に（1月に1回程度）職員と児童が一对一で面接を行い、定められたフォーマットで、暴力（性加害も含む）問題を中心に、丁寧に聞き取りを行うものである。聞き取りは、加害、被害だけでなく伝聞情報も含めて行われ、児童から暴力問題が伝えられた場合には、速やかに事実確認や関係児童相談所との調整、児童に対する指導を行い、その結果は児童たちに分かるようにフィードバックされる。A学園の例からも、継続的な聞き取り調査は潜在的な暴力を把握するためには、極めて有効な手段であるといえる。また、A学園職員アンケートでも、聞き取り調査を行うことで児童と一对一の話し合いの機会が増え、児童との信頼関係が深まったことが挙げられている等、安全委員会方式がしっかり機能していくためには、「聞き取り調査」を継続的に丁寧に行っていくことが大切である。

(2) 嚴重注意以前の対応の的確な選択

安全委員会方式では、安全委員会の対応として「嚴重注意」を含めて4つの基本的な対応（「嚴重注意」「別室移動」「一時保護」「退所」）があるが、そこに至る前の対応もいくつか考えられている。筆者らは、安全委員会方式を実践していく中で、嚴重注意前に、①内部委員注意、②内部委員（施設長）注意、③内部委員伝言、④委員長注意のステップを取り入れている。暴力等の問題が発生した場合、その場で担当職員が注意し、児童に反省を促し、望ましい行動を指導するが、必要に応じて安全委員会の内部委員である職員が担当職員からの報告を受けて改めて同様の指導を行うものが①である。②はさらに施設長が個別に指導を行うもので、施設全体としての注意、指導である旨のメッセージが込められることになる。③④については、安全委員会での審議を経ての対応となるが、③は、安全委員会では本児の行動が審議され、しっかり注意、指導を行うよう委員会で指摘された旨を内部委員から児童に伝えるというものである。児童に、自分の行動が安全委員会では取り上げられる程の問題であるという意識を持たせることがねらいである。④は、安全委員会終了後に、委員長が個別に当該児童に注意を与え、指導するものであり、このレベルで、児童は初めて施設外の者から、注意、指導を受けることとなる。児童に対して注意、指導を行うのは、現場でその時、機を逃さずに担当から行われることが基本であるが、児童に対して、より強いメッセージを伝えていくために、このようなステップが準備されている。問題の深刻度、再発性、施設に与える影響等に応じて、適切に選択され、より効果的な指導が行われることが必要である。

(3) 嚴重注意の適切な実施と日々のアフターフォローの重要性

A学園において行われた嚴重注意の様子については先に述べたが、「嚴重注意」は、児童が委員会の場で外部の委員により厳しく叱責されるものではない。児童に関わる地域の関係者が、担当職員と当該児童に、いけないことはいけないとしっかり注意するが、一方で温かく応援し、励ます場面でもある。児童にとっては、自分の身近な、いわゆる「偉い入たち」が、自分のことを見てくれている、心配してくれている、応援してくれてい

るという実感が強く感じられる場面となる。この嚴重注意については、導入していない施設関係者等から、懲罰委員会ではないかと批判を受けるものであるが、筆者らは実際の嚴重注意の場を経験し、懲罰委員会というよりも、悪いことは悪いとして、厳しく注意し、子どもにどうしたらいいのか考えさせ、それが実行できるように周囲の大人たちがそろって応援する、児童にとって学びの場であるという印象を持っている。実際、嚴重注意を受けた児童が、その後担当職員に対して、あの委員さんはあんなことを言ってくれた、と委員のことばを覚えている発言をする等、児童にも職員にも印象に残る場面となっている。

ただし、この嚴重注意だけで児童の行動改善が進むわけではない、それをきっかけとして、子どもが日々の生活の中で頑張ることができるように、嚴重注意をフォローするための日々の個別支援計画が必要である。A学園では、表1で示したように、施設の職員と児童が一緒になって実施できる応援プログラムを独自に作成し、継続的に実施していくことで、事件の再発を防いでいる。なお、このフォロー計画は、A学園、B寮とも、委員長注意以上の事案に作成している。

(4) 児童・職員への周知の徹底（立ち上げ集会、周年記念集会、安全委員会たより）

安全委員会方式を導入する際に行われる「立ち上げ集会」は、施設として児童も職員も安心・安全に生活できるよう、これからは暴力のない施設にするという決意表明を行うものであり、施設全体の意思として児童・職員へのメッセージ性が高いイベントである。また、周年記念集会は、安全委員会が日常的なものになってくる中で、改めて暴力はダメという意識を再確認する機会となるものである。さらに、定期的に発行される「安全委員会だより」は、安全委員会ではどのようなことが話し合われ、その結果がどうであったか等の情報を児童にフィードバックするものである。このように、児童も職員にも、暴力はダメという意識をしっかりと根付かせ、そして意識し続けて風化させないための取り組みは、効果的で安定的な安全委員会の運営に必要不可欠と考えられる。

なお、B寮では、内部委員以外の職員が安全委員会にオブザーバーとして参加することを認めるとともに、職員向けの「安全委員会だより」を発

行し、内部委員以外の一般職員の安全委員会方式に関する理解と意識を深める取り組みを行っているが、こうした工夫も必要であろう。また、導入後も職員の理解を深めるための研修も必要であろう。

Ⅵ おわりに

安全委員会方式を導入しているA学園、B寮の活動の状況とA学園職員に対するアンケート調査から、安全委員会方式導入の効果と効果的で安定的な安全委員会の運営のために必要なことについて検討した。

今後は、これらの結果を踏まえ、引き続き、安全委員会方式が導入されていない施設への導入と、導入されている施設での効果的で安定した運営について、施設と協働しながら取り組んで行くとともに、施設における児童と職員の安心・安全な生活を保障する仕組みやそのレベルアップを図る方法について、安全委員会方式のみにとどまらず、広く研究、検討を行っていきたい。

【文 献】

- 田嶋誠一「児童福祉施設における暴力問題の理解と対応」（金剛出版 2011）
- 田嶋誠一「いじめ・暴力問題が私たちにつきつけているもの」（現代思想 第40巻第16号 12月増刊号 2012）
- 田嶋誠一「いじめ・暴力問題と安心・安全への取り組み」（教育と医学 第61巻第7号 2013）
- 田嶋誠一「非行問題における暴力問題への対応の重要性」（児童心理 第68巻第9号 2014）
- 築島 健「社会的養護の施設で生活することのリスク」（教育と医学 第60巻第8号 2012）
- 厚生労働省「児童相談所運営指針」（2013）